

【学校教育目標】 「自分とみんなのために 心を尽くし、学びを深め、ともに動く 大小っ子の育成」
【目指す児童像】 「気づく子 学ぶ子 元気な子」

玖城のほitori



大村市立大村小学校
令和8年度 学校だより
第2号
令和8年4月17日発行
文責：校長 堺 邦寿

★ 大小のリーダーとして 6年生の活躍が輝いています！ ★

6年生は、昨年度の6年生の卒業後、3月24日の離任式・修了式。そして今年度、4月7日の着任式、始業式、4月9日の入学式と、昨年度末から今年度始めにかけ、大村小学校のリーダーとして大活躍しています。4月14日は、1年生と6年生の顔合わせがあり、ペアとなる1年生に優しく声をかける姿が輝いていました。また昨日は、1年生の給食スタートの日でもあり、そこでもやさしくていねいに教える姿がありました。6年生=学校のリーダーという立場を通して、大きく成長しています。

ここで、離任式、着任式、入学式で、児童代表として挨拶をしました3人の挨拶を紹介します。

離任式 あいさつ
これまで本場にありが
り任される先生方、
これまで本場にありが
とつごいしました。先
生方には勉強や委員会
活動、クラブ活動、運動
会など様々なことでお
世話になりました。先
生方との思い出は私に
とっつけかけがえのない
思い出です。私たちが
ここまで成長できたの
は先生方の手助けがあ
ったからこそです。大
村小学校の三つの自ま
ん、あいさつ、PKG、
読書。このじまんをい
つまでも忘れないでく
ださい。お別れするの
はとても悲しいです
が、先生方から教わっ
たことをむねにこれか
らがんばります。新
しい学校で「活やくさ
れることを大小から願
っています。いつまで
もお元気で。これまで
本当に、本当にありが
とつごいしました。
児童代表
五年
(現八年生)

着任式 あいさつ
新しく大村小学校へ
来られた先生方。ようこ
そ大村小学校へ。大村小
学校には、私が思う三つ
のじまんがあります。一
つ目は、あいさつです。
元気がよくて気持ちの
いいあいさつができる
のがじまんです。二つ目
は、読書です。一年生か
ら六年生までたくさん
本をかりて読んでいま
す。三つ目は、歴史があ
ることです。三年前に創
立百五十周年をむかえ
ました。この大村小学校
には黒門という門があ
ります。黒門は入学式、
卒業式、り任式、着任式
の四回しかありません。
この三つが大村小学校
のじまんです。先生方に
は授業でたくさんこの
ことを教えていただいた
り、休み時間に一緒に遊
んだりのしていただきた
いです。これからよろし
くお願いします。

入学式 あいさつ
一年生のみなさん「入学おめでとう」つぎいます。み
なさんが入学してくるとのぞ、私たちが「とっても楽しみ
にしています。」
大村小学校には、自まんでできることが三つあります。
一つ目は、黒門があることです。入学や卒業するとき
しかくぐることでできない特別な門です。その黒門を
くぐる時、運動場に大きな木の木があります。ぜひく
すの木にも注目してみてください。
二つ目は、あいさつがすてきなことです。自分か
ら、一秒とまっつ、おじぎをこして元気な声であいさつす
ることをがんばっています。一年生のみなさんも、百点
のあいさつを目指して、がんばってください。
三つ目は、PKGの取組です。PKGは、パーフェ
クト給食カイドのことです。給食の準備は、みんなで力
を合わせて取り組まないで時間がかかって、給食を食
べる時間が少なくなってしまうです。みなさんも早く
PKGを覚えて、おいしい給食をいっぱい食べてくだ
さい。
このように、大村小学校には、たくさん自まんがあ
ります。他にも、運動会や遠足など、ワクワクすること
がいっぱい待っています。勉強やまつじなどいろいろな
ところで、みんなで力を合わせることがあります。みん
なで力を合わせると、楽しいことが、もっと楽しくな
り、いろいろなことにチャレンジできるようになります。
最初はドキドキするかも知れませんが、困ったこと
があっても大丈夫です。いつでも私たち六年生が助け
ます。
今日から、みなさんもこの大村小学校の仲間です。
「自分とみんなのために」力を合わせて、楽しい学校生
活にしていきましょう。
児童代表 六年

※裏面に、木村指導教諭作成の特別支援教育だより（みんなちがってみんないい）を載せています。どうぞお読みください。

～ みんなちがって みんないい (その1) ～

今年で3年目となりました。学校便りをお借りして、子どもの特性や子育てに関わる内容を中心としたお話をさせていただきます。1年に1回の内容を読み返していただきながら、ご理解を深めていただければと思っています。同じ話題をお届けすることになりますが、是非ご愛読いただければ幸いです。

4月は愚直に学校教育の基本である「多様性を認め合う」ことの大切さを、金子みすゞさんの詩を通してお話させていただきます。

わたしが両手をひろげても
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥はわたしのよう
地面(じべた)をはやくは走れない
わたしがからだをゆすっても
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴はわたしのよう
たくさんうたは知らないよ
鈴と 小鳥と それからわたし
みんなちがって みんないい

金子みすゞさんの「私と小鳥とすずと」は、インクルージョンや多様性を語る時によく用いられます。この詩は「多様な人々が互いを認め合い、協力して生きていくことの大切さ、その考えを実践し子どもを育てていく学校でありたいこと」を表現する一つの指針でもあります。

「多様性を認め合う」とは、「人種・性別・国籍・年齢・文化・宗教・思想・価値観・障害の有無など」の違いを認め、互いに尊重し合うことです。

日本は2007年に国連の「障害者権利条約」に署名し、そこから様々な法整備を行いながら2014年から順次施行しています。

長崎県は2013年に「障害のある人もない人も共に生きる平和な長崎県づくり条例」を制定し、医療・福祉・行政・教育など様々な分野での差別解消を実践していくことができるよう、取組を深めている途中です。条例ができたからと言って、差別が無くなり、多様性を認め合う世の中にすぐ変わるわけではありません。最も大切なことは、多くの人が理解を深め、その意識を共有していくことです。ところが、「自分は理解している」「自分は差別などしない」と思っている、実はできていないことがほ

とんどなのです。昨年も正解ジェンダーキャップ調査の結果を紹介しましたが、2025年の最新結果でも日本は世界148カ国中118位と横ばい状態でした。もちろん、先進国の中では断トツの最下位です。日本は障害者差別だけでなく、男女差別、就労・経済の分野でも格差が大きく、もっと意識を高めていく必要があります。

このような格差や差別意識は、無意識のうちに人の価値観に刷り込まれていきます。最も影響力があるのは家庭です。昨年もお話ししたように、男女で洋服の色や形態を決めつけてしまうことはありませんか？例えば、「女の子なんだから、ズボンばかり履かないで、たまにはスカート履きなさい」とか、「男の子がまごとをするなんておかしいよ」など、知らず知らずのうちに、子どもに偏見や差別意識を刷り込んでしまうこともあります。また、両親共働きであっても、「家事はすべてお母さんの仕事。お父さんは料理も洗濯もできないから仕方がない」などいつの間にか男女の役割分担が当たり前になってしまい、それが普通だと子どもが考えてしまうことも同じです。

「障害」や「仕事」、「考え方」や「慣習」などを例に挙げれば、「ちょっと変かも？」と思えることは私たちの身の回りにあふれ返っています。普段意識せず、当たり前だと思っていたことに意識が向けられるようになることが大切です。

しかし、多様性を尊重するあまり、個性や特性に配慮し、個を大切にすることだけが優先されてしまうことも正しいことではないと言えます。人は社会の中で平和かつ安全に生活しています。平和で安全に生活するためにはルールを守る必要があります。個性や特性を理由にルールを破っても良いということは認められません。尊重され優先される価値観と多様性の関係については、慎重に考えなければならぬ側面もあります。

インクルーシブ教育の考え方は「多様性を理解し認め合う」ことで、そのために私たちは「個に応じた支援や対応」を大切にしなければいけません。

「多様性を認め、尊重する」ということは、価値観や時代など様々な条件に左右されることなく、守られ尊重されなければならないものですし、行き過ぎた利己主義にならないよう十分気を付けなければならないものでもあります。

「みんなちがって みんないい」の意識をみんなと共有できると素敵ですね。